

教師という仕事

——ワクワクは一生続く——

法政大学キャリアデザイン学部兼任講師 吉池 俊子

3月で教員と名のつく仕事をすべて卒業することになった。開放感を想像したが、ガックリ感に襲われている。生徒の傍にいられないことの喪失感は、予想をはるかに超えて、驚いている。私はそんなに教師という仕事が好きだったのだろうか？

大学で教える場を与えられた数年、特にこの1年に絞って振り返り、教師という仕事を持つ魔力の片鱗に触れてみたいと思う。

1 百聞は一見にしかず……映像は力なり

高校教員だったためか、全員が授業に真剣に向き合ってほしいという願望が強い。

高校時代、関心を得られ具体的な理解につながり、授業効果を高めた教材の一つが“実物”であり、それを補う“映像”だった。それは、大学生も同じと感じている。高校教員の頃は、特別教室でしか観られず予約が殺到した。映像の代わりに、図版や写真、漫画プリントも使った。今もその習性が抜けず、新聞の切り抜きやエアチェックした映像の録画が膨大にある。

今の生徒は、生まれた時からIT・映像に取り囲まれ、何か調べようとすれば、PCやスマホで検索すればよい。思考力が育たないとの批判があるが、そうだろうか。安易に回答に到達できるのはその通りだが、そこからさらに疑問を生じさせる思考方法さえ身につければ、ITの活用は、求める資料を素早く幅広く膨大に入手でき、いいことづくめのように感じている（…漢字を忘れるなどのマイナス

は否めないが）。

豊富で正確な資料をもとに検討した後の思考・討議は、深い結論への道筋となるはずである。

映像は、まさに「百聞は一見にしかず」、教材にふさわしい映像をどう発掘するか、テレビのエアチェックやネット検索、DVDの情報を得る日を過ごしてきた。自分で撮った現場（神奈川県のみ軍基地、寿町の寄場、韓国、中国、マレーシア、シンガポールの日本軍の加害の跡、被害者の証言）の映像から最適なものを選ぶのは、生徒の反応——どんな意見を出すだろう、感想文には何を書いてくれるだろう——を、あれこれ想像しながの作業で、映像に見入る生徒を思い浮かべてワクワクしていた。想像とかけ離れ、え？ということもあった——。一番夢中なのは先生じゃないのという生徒の声が聞こえてきそうだった。

教育実習では、教材を映像に偏らせるのは好ましいとは言えないが、実際に教員になったあかつきには、映像の教材化、教材にふさわしい映像の探索、映像を創り出すことをぜひお勧めしたい。何より教員自身が楽しく励まされる。

2 実物から学ぶ

1) お宝教材

前述した“教材”には、映像でなく“物”もある。1977年9月27日、神奈川県厚木基地を飛び立ったRF-4Bファントムジェット機が墜落し9人が被害を受け翌日には3歳と1歳の幼児が「パパ、ママ、バイバイ」の声

を最後に息を引き取った。この米軍基地の授業中、生徒が「先生、これあげる」と米軍機の残骸を渡してくれた。お兄ちゃんが、事故跡を見に行き行って拾ったのだという。

入学式に校門前の坂下の電信柱に掲げられた私の名入り看板（ビニール掛で雨でも可）や、当時何度もかかってきた電話（職場や自宅）の内容も生きた教材として活躍した。

両親への東條英機からの（といっても誰にでも出したらしいが）感謝状（勿論ホンモノ）も、大活躍した。これら“実物”は、生徒たちの、これってなに？？なんで？？どうなったの？？を呼び起こし目がキラキラしていた。

2) 生きた教師から学びたい……

NHKの「プロフェッショナル」の教師たち

今年のアンケートや授業感想文で、「優れた教師に学びたい」が相当数あった。

NHKの「プロフェッショナル 仕事の流儀」という番組の、「楽しんで学べ 傷ついて育て 中学英語教師 田尻悟郎の仕事」（2006年9月放送）と「未来をつかむ、勝負の教室 小学校教師・菊池省三」（2012年7月放送）を使わせて戴いている。田尻先生は英語の教師ではあるが、社会公民科にも共通する、楽しく自発的で効果が上がる「魔法」を学ぶには最適だ。なにしろ子どもたち自身が楽しくてたまらないという授業で、生徒たちが相互に学びあい、英語が得意な生徒の能力を不得意な生徒を教える活動で一層伸ばすのだ。得意な生徒も不得意な生徒も、共に人間として大きく豊かに成長が促される。まさに「教育」がそこにある。教師の一方向的な授業の対極、これぞ授業！なのである。

田尻先生のこれでもか！という大袈裟なアクションで授業は活気づき、生徒たちは乗りに乗ってくる。先生は、鏡を見ながら表情の練習をされたそうだ。その努力は、はっきりと生きている。5分刻みで進むリズムカルな授業、聞き取りの練習やじっくり考える授業

がタイミングよく組み込まれ、あつという間の45分だ。

子どもたちの自主性を伸ばす上で特に効果的と思うのは「自学ノート」と呼ばれるものの活用で、社会科学習には、特に適していると思う。

社会科でやるとしたら……と考えつつ観ると一層引き込まれる。

カリスマのような田尻先生も、当初は、生徒に怖いと恐れられながら部活指導をし、授業を力づくでやる教師だった。生徒から一斉に反撃を受けて失意の底に落ち込んだが、脱却された。その経緯も詳しく描かれている。だから私たちも学びうるのだとしみじみ思う。

菊池省三先生は20年間にわたって崩壊したクラスを次々と立て直した小学校教師だ。

社会公民科とは無縁のように思うかもしれないが、生徒をどうみるのか、生徒の力をどう伸ばすのか、生徒は何に悩み何に苦しみ何を力に延びてゆくのかなどを学ぶのに最適な方だと思う。

クラスの再生で菊池先生が大切にしているのが「自信が人を伸ばす」ことで、「自信がないから、友達をいじめたり、教師に反抗的になる」と言う。

子ども達の「荒れ」や「学級崩壊」が深刻な状況下、「ほめ言葉のシャワー」等の実践で、子どもたちを再生し「学級崩壊請負人」とも呼ばれている。多くの引き抜きを断り、地方の現場教員を貫かれている。

菊池先生は、子どもたちに“ことばの力”を身につけさせることで、学級崩壊したクラスを立て直した。“ことばの力”は大切な鍵だと言う。子どもたちに「クラスからなくしたい言葉」と「クラスにあふれさせたい言葉」を挙げさせる。後者は「ありがとう」「頑張ったね」「成長したね」というような言葉が沢山出てくる。子どもたちの本当の気持ちを探り出すのだ。

相手の良いところを見つけてほめる「ほめ

ことばのシャワー」や自分自身を見つめる「成長ノート」で、一人ひとりが自分に自信を持ち、自分自身の力で成長し、クラスの子もたちの関係もどんどん変わっていく。心が育ち「生きる力」がついてゆく。

菊池先生の DVD の感想は「見守っているだけに感じたが、助言のタイミングが実に上手」「【啐啄】という言葉が菊池先生にピッタリな言葉だ。それには日ごろの観察に費やす時間や体力・忍耐は膨大で、だからといってこれ見よがしに見せつけない。常に謙虚で、でも叱る時は叱る。菊池先生がパンの耳が苦手なことを生徒に知らせ教師も同じ人間なのだと教えている。」と絶賛していた。

両者の感想に共通するのは、「大きな愛情を土台にほめて伸ばす、生徒中心の授業、自信が人を伸ばす等々、大切なことをたっぷり学んだ」で、「熟していない実は摘み取らない」（田尻先生）など、最も大切な部分を、しっかりと受け止めている。

また、大切なこととして、「◇生徒とトコトン向き合う◇本人が気付き始めた時に声をかける◇お前なら出来るとやる気にさせる」等、方法だけでなく「生徒を信頼しているからこそできるし生徒からも信頼される」と、本質をしっかりとつかんでいる。

優れた教師が、元々優れているのではなく、失敗を乗り越え現在に至っている点も大切に、私もなれるかもしれないと感じさせてくれる。二人の教師から学ぶことは大きい。私は授業前と授業の際に見るので何度見たか判らないほどだが、毎回新しい発見があり心の底から感動しワクワクする。

3) 本物の生きた教師と出会いたい

本学には、素晴らしい教員がたくさんおられるが、都立三鷹高校元校長の土肥信雄さんはその一人だ。勝手に心の師と仰ぐ土肥先生に、ずうずうしく「社会公民科教育法の特別授業」をお願いした。先生は快諾して下さ

った。

オランダとフィンランドの教育を学び、その後日本の教育の現状と課題を学ぶと、教室はちょっと沈んだ雰囲気になる。日本の教育の現実がこんなに酷いとは……と、これまで問題視せず気付かなかったが、世界の基準から見るとどうなのか、自由で生徒中心の教育が実際に存在し生徒が生き生きと過ごしていることを知った上で、日本の教育を見つめ直す、どうしても沈鬱な気分になる。

だから、深刻な問題に流されず埋もれず、実際に日本の教育の問題を解決しようと立ち上がってきた校長先生から直接話をお聞きできるのは、最高のシチュエーションだ。驚嘆したのは、土肥先生が、わずか 90 分の授業、DVD も見ての講義で、教室の全ての学生の心をわしづかみにされたことだ。

DVD 中の土肥校長は、校門に立ち、すべての生徒を名前呼びかけ、一人一人を何よりも大切にしておられた。

著書「それは、密告から始まった」の中の「10 生徒がくれた卒業証書」では、土肥先生と生徒たち、そして保護者の強く深い絆・信頼関係が書かれている。

「2009 年 3 月 24 日、この日は私にとって一生忘れられない日になりました。その日は他校に異動する先生や、退職する先生たちのための離任式がありました。(略)ラグビー部の U 君が、「これから、校長先生が教員生活の卒業なんで、卒業証書を贈りたいと思います」と言って、卒業証書を読み上げました。

「卒業証書、土肥信雄。右は教育委員会の弾圧にも負けず本校所定の課程を修了したことを証する。平成二十一年三月二十四日、東京都立三鷹高等学校、第五十八期卒業生一同」感動のあまり、涙が出そうになりました。しかも卒業証書だけではなかったのです。卒業生全 8 クラスから、卒業生全員の色紙も渡されたのです。」(略)「離任式が終わった後、校長室に帰り、その色紙を一枚一枚、そして一

人ひとりの卒業生の言葉を読みました。一人ひとりの言葉の中に、私に対する思いが伝わってきて、私の中に一人ひとりの卒業生の姿がよみがえってきました。あの卒業生がこんな思いを私に持っていてくれたのか。いつもは私を無視するような態度だったのに、本当はこんなに私のことを思ってくれていたのか、(略) 卒業生全員の名前を憶えていて本当に良かったと思いました。名前から、言葉と顔が一致して日頃の姿を思い出し、そしてこの生徒がこんな言葉を贈ってくれたのかと思うことができたからです。」(略)「生徒からの「卒業証書」と「色紙」、そして保護者からの「色紙」、全てが私にとって、最高の贈り物であり、私の最高の宝物です。」

こんな素晴らしい宝物を受取れる教師は、多くはないだろう。まさに教師冥利に尽きると言える。感想文には、「そんな教師をめざしたい」と、土肥先生の授業から受けた強い感銘が熱く書かれていた。「こんな先生がいるのなら日本の教育にも希望がある」とも書かれていた。

今年度はもう一人、本物の社会科の教師に来て頂いた。長く法政二高の社会科教員を勤め、現在は明治大学の特任教員をしつつ「明治大学平和教育登戸研究所資料館」の展示専門員として研究を続けている渡辺賢二先生だ。

生徒とともに、陸軍登戸研究所の研究を続け、登戸研究所第二科第一班に勤務していた伴繁雄さん(研究員)が「大人には話さないが、君たち高校生には話そう」と重い口を開かれたり、高校生たちの努力によって隠されていた実相が次第に浮き彫りになったことをつぶさに語って下さった。

そして、「足元を掘ればそこに泉湧く」と、一人一人が出来ること、しなければならないことを、実践した方が持つ重みとともに伝えて下さった。

実は、この授業の後で、2015年度川崎市文化賞を受賞された。地域と結びついて歴史を

掘り起し、生徒とともに生徒を伸ばしつつ行った教育活動を讃えての受賞で、受賞理由は「法政大学第二高等学校教員時代に陸軍登戸研究所に注目、調査研究を開始されました。その中で、高校生や市民と共に行った当時の関係者訪問をきっかけに、長年ベールに包まれていた研究所の実態が解明され、歴史上から消えていくはずだった真実が伝承されることとなりました(後略)」とあった。ちなみに、川崎市文化賞は小澤征爾さん、今村昌平さん、奈良岡朋子さんらが受賞している権威ある賞だ。

このお二人からは、非常に多くのことを学ぶことが出来た。

管理職は、とにかく生徒と遊離しがちである。多忙で生徒に触れる機会が少なくなるであろう。ところが土肥先生は、毎朝校門に立って全生徒に声をかけることで「教師の命」を燃やし続けられた。心が震える。

渡辺先生は、高校教師であることで大学の研究者では得にくい研究成果を獲得された。地域に根ざす教育活動の典型を具現化され、生徒とともに歴史を掘り起こすという社会科教師の典型の一つを实践された。どんなに大変だったか、また、心を砕かれたことか、想像を絶するものがある。

私も学生とともに、お二人からワクワクする「宝物」を学ぶことが出来た。

3 世界の優れた教育を学びたい

アンケートに「世界の教育事情を学びたい」があった。日本の教育を相対化し客観的に見つめるには世界の視点は不可欠である。

「地球でイチバン……」というNHKの番組で「地球でイチバン 子どもたちが幸せな国」としてオランダ、「地球でイチバン アタマがよくなる授業?!」としてフィンランドが紹介された。この数年はこの2つの番組を授業で取り上げてきた。ちなみにフィンラ

ンド版では、尾木先生が登場し番組を牽引されている。ここではフィンランドについて述べてみる。

世界 65 の国と地域の子ども 47 万人が受ける PISA での順位が低下している日本にくらべ、少し前までフィンランドは 1 位だった。日本の教育では欠落しがちとされる、思考力、問題を解決する能力が試される PISA。番組では、「相棒」シリーズで鑑識役の六角精二さんがフィンランドに行き、セッポ学校を訪問して、創作作文という特殊な作文の授業を参観・参加する。発想力がアップするというアヤトウス・カルツタの「思考の地図」が紹介されるが、この「思考の地図」は、目で見ただけのものから次々に発想し、それを樹形上に広げていく発想法で、フィンランドでは特に大切にされている。

学校の授業では電子黒板を導入、生徒達が体感的に授業に参加できる仕組みになっている。特別の眼鏡をかけ、たとえば身体の仕組みが立体的に判る。「こんな授業を受けてみたい」と感想文にあったが、まさに同感である。そんな贅沢が出来るのも、フィンランドでは、GDP の教育予算に割く比率が日本の 1.7 倍もあるからで「年々教育予算が削られている日本は、未来が無い」という感想が出された。六角さんは「生徒が自分の意見を論理的に発言していた」と感想を述べた。

『論理的な発言（つまり思考と表現）』ができること、それは社会公民科教育では特に重要だ。

「思考の地図」は経済成長にも繋がり、番組で紹介されたロヴィオ社では、世界中の子供達の間で大人気のアングリーバードというゲームをその方法で開発したそうだ。このゲームの宇宙版には NASA が制作に協力、ロヴィオ社の開発チームが「思考の地図」をもとにゲームを企画する模様が伝えられた。

フィンランドでは、「思考の地図」を使ったこのような企業の活動によって、ここ 20 年

で GDP が 1.6 倍に成長をとげているそうだ。「教育は未来への投資だと実感した」と多くの感想文に書いてあった。

そのフィンランドも、昔は詰め込み型の教育が主流だった。ソビエト連邦崩壊を受けて、深刻な経済危機に陥った時、教育大臣のオリペッカ・ヘイノネンさんが教育再生を訴え、「教育は未来への投資」と大胆な改革を行って、今のスタイルになったのだという。

フィンランドの元小学校教師メルヴィ・ヴァレさんを訪問し、フィンランドの教育改革の時期の実情を訊ねた。メルヴィ・ヴァレさんは、現役時代の話がされた。「授業の終わりに、ある生徒が私のもとへ来てこう言いました。『先生、どうしたら一日中ずっとそんなに話せるの?』。はたと気が付きました。ずっとしゃべり続けていたのです。教師が話す時間が長すぎたんですね。」

その時思いついたのが、子どもが好きなぬいぐるみを授業に使うというアイデアだったそうだ。手作りの人形を用いて、子供たちの考える力を引き出してきたのだという。

フィンランドでは、子供たちが自分で考える力を養うことは、学校だけでなく家庭も同じで、「ミクシ」（「なぜ？」という意）が魔法の言葉となっている。家庭でも親が子に積極的に「なぜ？」と問いかけることで考える力を養わせている。学校でディスカッションを行う際には、積極的に教師が生徒に「なぜ？」と問いかけるようにしている。

尾木先生は「なぜ？」と問われると論理力が養われる。論理力がつくとプレゼン力やコミュニケーション力といった本当の力というのが身につく。」と語る。

『ミクシ』は本当に魔法の言葉だ、と感想文にあったが、高校の授業では、それをやって、凄まじい勢いで授業が広がり、生徒が乗り出したという体験をした。問題は時間がかって予定通りには授業がすすまないということ。でもやる価値はありすぎるほどある。

教育の先進国は、授業料は無料、生徒や教師の選択権は非常に多く幅広く、大学入試がない…。残念ながら日本では、教科書検定や高利の奨学金が実情で、君が代を歌ったか教師の口元を見張ったり、生徒に関わる重要な審議に教員が挙手を許されないなど、世界が知ったらどれほど驚くだろうという状況で、非常に遅れた教育行政だ。小学校では、セブンイレブンはもう古く、シックスには学校にいて翌日帰宅ですと、現役の友人に聞くと、暗澹とする。

でもその中で、教師は子どもたちのために頑張っているということも伝えたい。

4 教師は素晴らしい仕事！

あらためて、教師生活を振り返って、どれほど素晴らしい仕事か、渦中(?)にいる時に、もっと気づいていればと悔やまれる。また、様々な学びがあったのだが、それを生かしてきたかどうか不安でもある。

この数年、尾木ゼミの聴講をさせていただいた。毎回、教育問題についての講義をお聞きできるという至福の時を過ごし友人に羨ましがられている。『生徒の立場に立つ』教育で一番大切なことを学んでいる。その尾木ゼミで、別の学びがあった。同じ事柄でも言い方ひとつで、印象が全く異なるというごく当たり前の経験で、教員には特に大事だと思った。

それは尾木先生が受講学生に私を紹介して下さった時のことで、「この学校の先生で、給料も出ないのに授業に来ておられるんです(笑)」不正確かもしれないが主旨はそうだった。実体は、授業料も払わず聴講している闖入者なのに。なるほど！そういう言い方がある！と頷いた。

「言い方」というのは不正確だろう。温かい眼差しや、芽を発見する心が生み出すのだとしみじみ感じた。

その「言い方」では、ウン十年前ハッとさ

せられたことがある。娘の一言だった。「そんな先生みたいな言い方しないで」——愕然とし、考え込んだ。いつの間にか、悪い意味の教師らしさが前面に出ていたのだ。“教師らしさ”からの脱却は、私の目標になった。

「どうしたら一日中ずっとそんなに話せるの？」生徒の言葉で変わったメルヴィ・ヴァレさん。教師は長いおしゃべりが“許され”てしまう。

田尻先生も菊池先生も失敗から学び、とびっきりの教師になられた。失敗は大切だと思う。尾木先生も、お母さまに「直樹は失敗しているから、きっといい先生になれる」と言われたそう。どんな辛い失敗も、教師という職業に活かすことが出来る。教師という仕事の魅力のまえには、ちっぽけに見えてくるに違いない。

教師は卒業しても、学ぶことで得られる感動・ワクワクは、永遠に続くと感じ始めた。それも教師の仕事を通じて得られたように思う。

振りかえれば振りかえるほど、教師は素晴らしい仕事！ワクワクする仕事！である。